



「三叉の座」(平成15年2月13日)

毎年2月13日に行われる大栄・奈土地区のオビシヤは、三叉路で杯を酌み交わす「三叉の座」など、今なお特色ある姿で大切に受け継がれている行事です。

いつ頃から始められたのかその起源は不明ですが、明治26年以降の祭礼を記録した『鎮守祭礼記録簿』に、宝暦4年(1754)に拝殿と幟2本を奉納したという記述が見られ、古くから行われていたものであることがうかがえます。

神事は13日の早朝から行われ、奈土地区の氏神様である盤裂神社で、奈土五区と六区の代表者が一堂に会し、五穀豊穰・家内安全を祈願。午後には「奉納盤裂神社御祭礼」の幟を掲げたそれぞれの神主宅で、祭礼式典が始まります。その年に不幸があった家を除き、区内の戸主全員が集まり、神主は紋付に羽織・袴で迎えます。集まった人々は、神社のお守り・ひし餅・お神酒などが載った「迎え膳」を振る舞われた後、名前を呼ばれます。神の依代(神が乗り移るもの)を祀った座敷に、4人ずつ向かい合った8人が杯4献を飲



奈土5区二人立ち一匹獅子の舞(昭和59年2月13日)

み、さらに向かいの人と杯を替え再度4献し、座を退きます。このような杯の儀は8人交代で行われ、この最中、庭では奈土芸能保存会の人々によって獅子舞が披露されます。そして、特別に「神様の座」と呼ばれる最後の座に登場するのが、区長・組長・当番神主・次期神主など8人。座敷を取り囲む人々が高砂を謡う中、決められた手順で杯をやり取りしながら、オビシヤの当番受け渡しが行われます。神様の座が終了すると、新神主は神の依代である御幣を襟に挿し、自宅に向かう最初の三叉路で改めて杯を交わします。これが「三叉の座」といわれる大変珍しい儀式です。神様の座に座った8人が、大根とサトイモで作った鶴と亀、腹合わせの生きた鮎を挟んで向かい合い、3献ずつお神酒を酌み交わします。

現在、北総台地に春を待ちわび豊作を願う早春の風物詩として、また、地区の人々の努力によって古式ゆかしい神事として受け継がれてきた奈土のオビシヤは、平成4年2月に千葉県記録選択無形文化財に指定されています。



奈土5区金岡家で行われたオビシヤ(昭和59年2月13日)

成田歴史 玉手箱

●68回●

歴史と伝統文化のまち・成田。市内には、歴史ある文化財が多数あります。

奈土のオビシヤ

地区の戸主が勢ぞろいし
古式にのっとりお神酒を交わす

編集後記

例年、この時期のわが家の仕事に医療費の還付申告があります。小児科・耳鼻科・皮膚科や薬局からもらった大量の領収書を前に、つつい後回しとなり提出が締め切り間際になってしまうことも。ことしこそ早めにと集計してみると、意外に少ない金額で申告が不要に。子どもたちも成長とともに丈夫になってきたということでしょうか。さて、国税庁ホームページの確定申告書作成コーナーを利用すると、様式に従って数字を入力していくだけで、申告書が出来上がります。入力後は家庭のインクジェットプリンターで打ち出せばそのまま提出が可能。面倒な仕事はなるべく楽をして早めに片付けたいものですね。

